

東京東雲

鳥取県立鳥取東高等学校同窓会
東京支部

東京東雲会会報 第5号
令和4年5月発行

編集・発行：東京東雲会
題字：奥村 浩治(山脈22回)



令和元年 東京東雲会総会&懇親会 集合写真

母校100周年記念総会の開催を

東京東雲会会長 林田 英樹(山脈12回)



いよいよ今年は、母校鳥取東高の創立百周年の年となりました。鳥取東高の前身の鳥取二中が創設できたのは、遠洋漁業で成功された徳田平一氏が百年前に私財を投じて必要な校地・校舎を寄贈されたおかげです。同氏は同窓生全員にとっての大恩人ですが、鳥取市の広報を見ると今年3月28日に鳥取市の名誉市民章が贈呈されています。顕彰式では、深沢義彦鳥取市長(山脈22回)から徳田家代理人の石丸文男同窓会長(山脈22回)に贈呈されたとのことです。

数年前までは、東京東雲会の総会に出席されていた上山信一氏(柏葉19回)に先日久しぶりにお目にかかりましたが、お聞きすると徳田平一氏の妹さんがおばあ様にあたるということでした。上山さんは、幅広い人脈をいかして鳥取の農産物の販売促進を支援されるなど故郷への思いが深い方であり、徳田家の社会貢献の遺伝子を受け継がれているのだと思ったものでした。

東雲会本部では、創立百周年を記念して母校の教育の更なる充実のために記念募金事業を実施していることはご承知と思います。既にご協力いただいた方もあると思

いますが、募金の目標金額に達していないとこのことで本部から再度の協力依頼が届いております。ご恩を受けた母校のために、東京東雲会としても会員の皆様に来る限りのご協力をお願い申し上げます。募金の概要や振込先などについては、東雲会本部のホームページをご覧ください。

東京東雲会は、コロナ禍のために過去2年間にわたって総会・懇親会を開催することができませんでした。5月には開催するかどうかの決定をする必要がありますが、その時点で新型コロナウイルス感染症状況や感染症対策の政府の方針などを踏まえて最終決定し、ご連絡する予定であります。開催に際しては、安心してご参加いただけるよう、感染症予防対策に万全を期してまいります。今年は、何とかして開催したいと考えて準備を進めております。「母校100周年記念総会」と銘打って、例年と同じく7月第1週の土曜日に当たる2日の正午から、法曹会館での開催になります。3年間のブランクを置いての開催ですので、皆さまには文字通り旧交を温めたいという思いが高まっておられるのではないのでしょうか。どうぞ多くの友人・知人をお誘いあわせてご参加をいただきますよう、ご案内を申し上げます。

創立百周年に寄せて

東雲会会長 石丸 文男
(山脈24回)



東京東雲会の皆様におかれましては、ますますご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。また日頃から同窓会活動に積極的にご参加をいただき、まことにありがとうございます。

さて、いよいよ母校鳥取東高等学校は本年2022年6月23日をもって、創立百周年を迎えることになりました。コロナウイルスによる感染拡大も3年目に入り、仕事や社会生活のあり方が大きく変わりました。今年の卒業生は高校生活3年の内2年間をコロナ禍で過ごした訳ですが、是非貴重な経験としてこれからの人生に活かして欲しいと思います。創立百周年に向けての同窓会活動も、長引くコロナウイルス感染拡大の影響により苦戦しておりますが、会員の皆様の熱いご支援、ご協力をいただき全力で進めています。会員の皆様におかれましては引き続きよろしくお願い致します。

今年の3月に吉報が届きました。鳥取東高等学校の前身である鳥取第二中学校創設の大功労者のお一人、徳田平市翁の鳥取名誉市民決定の知らせでした。記念すべき百周年の年に最高の知らせとなりました。

100年前の日本は第一次世界大戦の勝利により、列強の一国となり、世界でも有数の工業国となっていました。大正デモクラシーの流れの中教育熱が高まり、鳥取においても、当時の鳥取中学校には、定員の3倍を超える志願者が殺到したと言われていています。そういう状況の中、新設中学校の建設誘致合戦が繰り広げられ、県議会も大混乱に陥りました。建設費用のことなど様々な問題がありましたが、当時の鳥取中学校校長、後の鳥取第二中学校初代校長となられた林重浩先生の熱意と、現在の岩美町出身の実業家徳田平市翁の、郷土の役に立ちたいという強い思いからの寄付とにより、鳥取第二中学校が設立されました。将来7年制高校に昇格させることが寄付の条件であったため、既成の中学校には見られない特色ある学校づくりが行われたようです。それが建学の精神である「克己」「親和」「進取」という言葉で表され、今に続く鳥取東高等学校の校風になっているのだと思います。

創立百周年、改めて建学の精神に思いを馳せ、これからの100年を考える機会になればと願っています。

創立百周年を祝して

東京東雲会名誉会長 鈴木 誠
(山脈5回)



私が東高に入学したのは昭和26年4月で、山脈5回生です。既にそれから70年以上経過していますが、その頃の状況をはっきり覚えています。教室の窓から山陰本線の列車が見え、通過する列車により時間を確認することができました。

二年生の頃だと思いますが、日本で最初のノーベル賞を受賞した湯川秀樹先生が東高に来訪され、講演をしてくださいました。また、テレビの実験局が東高に来て初めてテレビ画面を見せてもらったことも覚えています。

つらい、悲しい思い出もあります。昭和27年4月17日、午後の物理の授業中に校内放送があり「鳥取駅前付近で火災が発生しました。近所の生徒はすぐに帰宅ください!」と。それから翌日昼過ぎまで火災は納まらず市内の中心部の半分以上(約4,000戸)が焼失してしまいました。また、ある時東高の生徒が校庭の土を採取に山に行き、そこで土砂崩れにあう事故で生徒一人が亡くなりました。学校葬が行われましたが、今でもその悲しみは頭から離れません。

さて、「東京東雲会」が発足したのは昭和30年の春のことで、私が関与させていただいたのが昭和40年頃からで、事務局を約50年相当させてもらい、当会の「会長」も約20年務めさせていただきました。毎年7月に総会を開催し、鳥取から校長先生にも遠路ご出席いただき、毎年母校の近況を報告をしていただいています。鳥取ゆかりの政治家や著名な芸能人にも来てもらい総会を大いに盛り上げていただきました。石破茂議員にも講演をしてもらいました。

ここ2年は新型コロナウイルスの影響で楽しい総会ができていませんが、今年は「創立百周年」でもあり、是非とも例年のように総会が再開されることを楽しみにしています。毎回の総会では最初に母校「校歌」を合唱し、最後には「故郷」で締めくくっています。その後は近場の酒場で二次会(大抵、同級生単位やクラブ活動先輩・後輩)を楽しんでいました。現会長である林田英樹会長には、今年こそ楽しい総会開催を熱望する次第です。

寄稿の締めくくりになりますが、鳥取東高の創立百周年を心よりお祝い申し上げます。

ふるさと鳥取の母校の歩み

東雲会事務局長 滝波 和宏
(山脈24回)



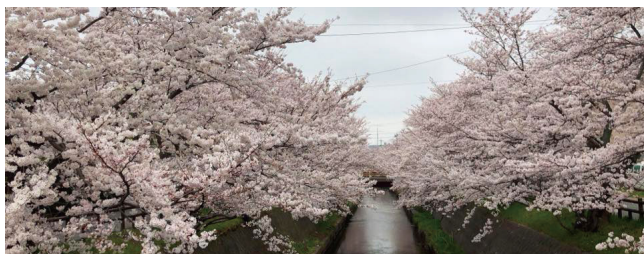
以前は、母校鳥取東高の正面を出てまっすぐ歩いていくと、天神川に突き当たり、宇部神社方面には右折して、鳥取駅方面へは左折して、「桜土手」を歩いて帰宅するのが常でした。昭和63年4月に「東雲橋」が完成し、続いて平成7年3月に「志学の道」が完成すると、正面からまっすぐ歩いて雨滝街道まで出ることが可能になりました。また、研修旅行や部活など、学校から直接バスに乗り込み、出発できるようになりました。

この原稿が東京東雲会の会報『東京東雲』に掲載される頃には、校門前のイチョウ並木が青々と繁る初夏になっていると思いますが、本日(4月4日)、東雲橋の上から桜土手を一望しますと、満開の桜が来る4月7日の入学式に集う私たちの後輩の新入生(山脈76回)を待ちわびているように思えました。

今年度はいよいよ母校鳥取東高が創立百周年を迎える年になりました。6月23日(木)の創立記念日には、同窓生(山脈37回)の中江康人氏(映画『万引家族』制作会社社長)をお招きして、校内で記念講演をして頂くことになっています。9月7日(水)には、県民文化会館において、「東高祭(午後)」と共に創立百周年記念式典を挙げる予定となっております。当日は同窓生の音楽家による記念コンサートも催される予定になっています。出来れば、大勢の同窓生の方々に会場にて母校の百周年を祝っていただけるように、生徒と職員が一体となって創立百周年を祝う準備を行っているところであります。

創立百周年事業としましては、上記の記念コンサートの他に、「百周年記念誌」「百周年記念誌ダイジェスト版」の発行、「トレーニング・ジムのリニューアル」「しのめ基金の創設」等も実行されることになっております。

末筆となりましたが、母校の創立百周年に際しまして、東京東雲会の同窓生の皆様から多大なるご支援とご協力を賜りましたこと、衷心より感謝申し上げますとともに、皆様の益々のご健勝とご活躍を心より祈念いたしております。



今後の生徒数の変化と東高

東高校長 中島 靖雄



東京東雲会の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

日頃は母校の発展のためにご支援ご協力を賜り厚く御礼を申し上げます。

さて、例年5月に鳥取県が本県の年齢別の児童生徒数の基本調査を行っています、それを眺めてみると大きな変化が見られます。

令和2年度に本県で生まれた子供が3,663人しかいないのです。令和元年度(3,969人)と比較しても約300人の減少、なんとコロナ禍の1年で、出生数が約1割も減少したのです。例年の減少幅が80人程度ですので、約4倍も減少したことになります。

今年生まれた子供たちは、15年後に高校生となりますが、今年度約5,000人いた高校受験生がこれが15年後には3,663人になるということです。おおよそ1,300人減るといえる計算になります。

本校の入学定員が280名ですので単純に言うと本校のような大規模校が約5つなくなる！という大変な事態となっています。

全国的な人口減少が続く中で、コロナ禍とのダブルパンチをくらった形になり、現在、県教育委員会が中心となって、高等学校の統廃合を含めた検討を行っているところです。

この大幅な減少は過去にも例がなく、本校のように100年続く伝統校だとしても、決して安穩としてはられないということです。

ちなみに、今年の本県の県立高校入試を見ても、かつてのように定員を超える高校は少なくなりました。正確な数字で言えば、この3月の本県の全日制公立高校の平均倍率は0.90倍であり、1倍を上回っている高校は、県下にわずか7校しかありません。

一方で、本校の今年度の高校入試では、定員280名に対して335人が受験する(1.2倍)という、県内一の高倍率でした。校長としては、地元の方々から愛され、親しまれていることが本当にうれしく、ありがたい次第です。

さて、大正12年創立の本校は、たくさんの方々のご厚志に支えられ、いよいよ令和4年度に創立100周年を迎えます。世の中の情勢には非常に厳しいものがありますが、今後とも本校の益々の発展にご支援ご協力を賜りますようお願いし、会員3万余名の皆様のご健康とご多幸を切に願ってご挨拶いたします。

東高の思い出

今年で東高創立100周年。皆さんの東高時代の思い出を寄稿いただきました。(順不同)

鳥取東高時代の思い出

藤田 寿彦 (山脈7回)

母校鳥取東高は今年6月で、創立100周年を迎える。おめでたいことだ。昭和29年4月から昭和31年3月までの3年間、夢多き青春時代を過ごし、数々の思い出を残してくれた学び舎である。今回は数ある思い出のうちの一つ、「牛の墓、落書き事件」ルポルタージュについて述べてみたい。部活は当時「新聞部」に属していて編集会議で、徳島市で頻発している徳島県立城東高校の正門や校舎に、校長のあだ名「牛の墓」と大きな落書きをして学校当局を悩ませているニュースの現地ルポをやりたいと提案した。その提案に対して賛同を得ることができ、遠路徳島市まで取材におもむき、特集記事を書いて、比較的好評を得たことを懐かしく思い出した。当時は通学には朴歯(ほおば)の下駄で靴がなく、兄の革靴を借りて徳島まで出掛けたのも懐かしい。



東高の思い出と現役母校先生方へのお願い

山根 司 (山脈10回)

私が母校東高に入学したのは昭和31年4月でした。同学年は約300名で6クラスありました。部活動は卓球部に入部し頑張っていたある時、11月下旬に米子～鳥取間の学校対抗駅伝が創設されることになり、急遽私も駆り出されることになりました。二日目の宝木～湖山間の長い区間を必死で走ったことが懐かしく思い出されます。



東高卒業後、東京に出てきて「東京東雲会」と巡り合い、母校東高とのつながりを感じつつ現在に至っています。母校の先生方へお願いします。卒業後、関東方面に行かれる後輩の方がいたら是非とも「東京東雲会」を紹介してください。毎年7月の最初の土曜日には当会の総会が開催され、母校から校長先生はじめ数名の先生方も出席され、母校や鳥取の近況を聞きながら「鳥取スイカ」や「ちくわ」を頂きながら先輩・後輩と楽しく懇談することができます。また、困ったことがあれば事務局に連絡すればよい解決策を見つけることもできると思います。

ソフトテニス人生

渡邊 達也 (山脈3回：柏葉25回)

私は幼少の頃病弱でした。国民学校5年生の時腎炎を患い10か月休みましたので、翌年再度5年生になり6年生の時終戦になりました。鳥取二中で体を鍛えるために庭球部に入部しました。当初考えていたより激しいスポーツでした。それでも始めたら楽しくて、放課後暗くなるまで頑張っていました。雨上がりの日、中庭のコートで滑って転倒、右手の下にラケットが入り手首を骨折してしまいました。試験の時など字が書けなくて苦労した思い出があります。東校2年生の時コートが新設され、一層庭球(現在のソフトテニス)に熱中するようになりました。部活のお陰で一人暮らし20年・今年満90歳になりますが、走れなくなってもまだ続けてコートに出ています。



後夜祭の思い出

本城 一隆 (山脈18回)

東雲祭のイベントの一つである「後夜祭(ファイヤーストーム)」の実行委員長に任命されました。当時の生徒指導部長の大西先生(当時は“鬼の大西”と呼ばれていました)から『事故やトラブル防止に配慮し、頼むぞ!』と言われ身の引き締まる思いでその時を待ちました。予定通り始まり、恒例のフォークダンスで炎と共に徐々に盛り上がり、その時数名の男女が私のもとへ駆け寄り『本城! ジェンカをやってくれ!』と言ってきました。急ぎ、大西先生の指導を仰ぎに伺うと『本城君、君に任せるよ』と言われ、身ぶるいを感じながらOKを出すと拍手喝采が起り、笑顔が弾け最高潮に達し、無事終了することができ大いに達成感を味わうことができました。消火を確認後、職員室の大西先生にその旨報告すると『ご苦労様、まあ一杯飲め!』と湯飲み茶碗を差し出されましたが、それは固辞し帰宅の途に着きました。責任の重さを感じた母校在学中の良い思い出の一日でした。



東高時代の思い出

荻原 聖子 (山脈34回)

創立100周年おめでとうございます。我々山脈34回生は、1964年の第1回目の東京オリンピックの年に生まれた世代なので、昨年東京オリンピックが開催された時は、年間を通して前回のオリンピックの映像があらゆる場面で多々流れていたもので、自分達の生まれた当時の映像がよく流れて、少しうれしくもあり、また時の流れの移り変わりに感慨深いものがありました。



さて、東高時代の思い出ですが、1980年当時は10クラスあり、420人の同級生がいました。バスケット部に所属して毎日汗を流していました。あの頃の部活は休憩になるまで水を飲むのを我慢することが修行みたいなもので、休憩になると水道の蛇口に直行して「生き返る～」と言いながら、がぶ飲みしていましたが、昔とは違って今の部活は、そもそも水道のお水を直接飲むことはないでしょうし、いまどき運動中はこまめに水分補給しないと逆に怒られますよね。なぜあの頃、日射病(今の熱中症?)にならずにみんな元気だったのか不思議です。

これを書きながら、気づいてみると今年が卒業後40周年になるので、東高創立100周年という記念すべき年ですし、誰かが音頭を取ってくればいつでも鳥取に飛んでいくのにな～とひそかに地元の同級生に他力本願で期待しております。

東高での思い出

細井 亮 (山脈23回)

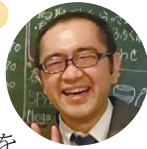
高校一年生。回りにほとんど知った顔がなく、なんだか落ち着かず、うろろ。そんな中、入学したての1学期にクラス対抗、スポーツ競技会が行われ、サッカーチームで参加した。



どこかのクラスには、当時現役のサッカー部員もいる中、我が1年6組はサッカーに関しては素人集団。ゴールキーパー高浜典之、バック細井亮、フォワードに横山功、角田圭司、吉川治男。(他にも、メンバーはいました) そんな面々で、皆がボールに群がるようなつたない試合運びだったが、あれよあれよという間に、決勝戦。そしてなんと勝ってしまった。誰もが予想していなかった、学年優勝。いやはや～、爽快、痛快だった。担任の宮本裕先生に、褒めていただいた。

東高の思い出(数学と記憶力)

須崎 浩史(山脈45回)



高校時代、記憶力に自信がなかった私は、その強化に一念発起!とはいかず、逃れるように論理と美しさを求め数学に没頭しました。解答を暗記すればいい、といった勉強法から遠く身を置き、出来るだけ少ない知識で出来るだけ多くの問題を解くことに快感を覚え、「おかぼん」こと、数学の岡本先生からも「もう少しテクニクなども覚えればいいのに」と少し呆れられるほどでした。その結果、今でも数理業務の専門家、アクチュアリーとしてなんとかやっていくことが出来ているわけですが、その代償として、記憶力が発達せず、今でも苦労しております。

さて、東高時代の楽しかった思い出はいろいろあるのですが、細かいところが欠落していて、何故なんだろう、と言いつつ書き始めたらい言いつつで終わってしまいました(笑)。そういえば、家に泥棒が入ったエピソードを語る「おかぼん」のしょげた姿は鮮明に思い出しました。

1年10組のソクラテスから学べなかったこと

加藤 晋(山脈53回)



高校時代の読書とはなんだったのだろうか、と考えることがある。当時、哲学に関心を持っていたので、教室に置いてあったプラトンの『ソクラテスの弁明』を手にとったことはよく覚えている。あまりピンとこなかった。初めて読んだのは、大学1、2年の時だろうか。プラトンが教室の中に他の本と一緒に並べてあったのは、当時、設立2年目だった「理数コース」のクラスだったことと関係しているはずだが、なぜプラトン、しかも学術的に見れば極めて謎が多く、多様な解釈のある『ソクラテスの弁明』が置いてあったのかはいまでもすこし不思議に思う。『ソクラテスの弁明』は、文学的に高い評価を受けているが、このことが理数コースの教室に置く理由にはなりにくいはずである。アリストテレスの『形而上学』や『自然学』の方が、よりわかりやすい選択だと思う。憶測に過ぎないが、ソクラテスの裁判での態度から、学ぶ上での姿勢を身につけて欲しいという先生方の考えだったのではないだろうか。

鳥取には流行りの服装が遅めにやってくるという話はよく耳にした。ポストモダンとかニュー・アカデミズムとかが鳥取に入ってくるのも遅かったのか、高校時代は90年代後半でそれらの流行から随分たっていたが、それなりにその手のものを読んだ。論文の執筆に役にたつということはないが、現在でもたまに読んでいます。ポストモダンやニュー・アカデミズムで活躍した人たちの新しい本が書籍部に置いてあれば、つい手にとってしまう。だが、普段、寝る前に読んだりするのは、主に80年代のものだったりする。

大学院に入って論文の指導を受けたのが、当時、文壇で活躍していた岩井克人先生だったことは偶然ではないのかもしれない。先生とは、こうしたことよりは経済理論について話すことが多いが、ゼミの懇親会するときなどで先生が当時を振り返るような話題をしてくださるのを聞くのはとても楽しい。先生と私とでは分野が随分違うので、友人には不思議がられることがある。実は、岩井先生から数学的な直感部分で教えていただくこともたくさんあったので、そうしたかたちで反論することが普段は多いが、改めて今振り返ると学ぶ上での姿勢についてとても大きな影響を受けているように思う。これは、高校の教室の片隅に置いてあった、プラトンの描くソクラテスからは学べなかったことである。

何気ない昼休み

平井 裕造(山脈41回)



とにかく早食いだっただけ。さっと弁当を食べ終わると足早に向かうところがあった。正門を出

て道路を渡った右手にある合宿所前の石段。ここで昼休みを過ごすのが大好きだった。春は川岸の桜を眺め、夏は木漏れ日に包まれて涼を感じる。秋に色づく銀杏は実に見事。でもちょっと臭かった。冬の思い出がないのはさすがに寒かったからか。石段に腰をおろしているとか向かい側の学食から腹を満たした友人たちが次々と出てくる。よお!と声をかけ合いながら自然と車座ができて談笑がはじまる。気づくといつも十数人ほどの輪ができていた。何を話したのかは正直あまり覚えていない。ただ、いつも腹を抱えて笑っていた。転げまわって笑っていた。日々あたりまえのように楽しんでいた何気ない昼休み。今ふり返るとかけがえのない幸せな時間だった。

「なかよし」の思い出

真嶋 修慈(山脈47回)



学校外では東高の隣にあった駄菓子屋「なかよし」を懐かしく思い出します。毎日部活後に寄っては100円に収まる駄菓子の組み合わせを悩んだり、かと思えばまれに奮発してラーメンを食べたりしていました。このラーメンはちょっと独特で、確かスープはうどんのもの、そして普段あまり見かけないモズクも入っていたと思います。ちょっと不思議なラーメンですが部活後の高校生には何よりのご馳走でした。「なかよし」の前の道は部活後の学生のたまり場で、日没が早まった冬場には友達の顔が見えなくなるなか、たくさんの知った声と笑い声があたりには賑やかに広がっていました。「なかよし」はもう無くなってしまいましたが、とても懐かしい思い出です。

東高の思い出

片山 香織(山脈45回)



平成3年の春の合格発表の当日の朝、適度な緊張を感じながら東高へ赴き、校門から少し入った所に設置された合格者のボードに自身の番号を見つけた瞬間の事を今でも鮮明に覚えております。その瞬間、表面的には喜びを抑えたものの、心の中では大きく万歳をする15歳の私がいまいました。今思うと、もっと素直に嬉しい感情を露わにしてもよかったなあ…なんて、ふと思い出します。

さて、3年間の東高での生活ですが、兎にも角にもバドミントン部の活動が思い出の多くを占めており、今でも時折夢に出てくるほどです。2階建てのコンクリート造りで連なる部室棟の一室、『女子バド部』の部室では、放課後はもちろん中間・期末試験の休部期間中も数名の部員で集い、部活動に関わる会話はもちろんの事、恋愛話や進路の話に花を咲かせたものです。

そんな青春真っただ中の楽しみの一つといえば、校門を出てすぐの個人商店「なかよし」の駄菓子や、安くて素朴な美味しさの焼きそばでした。数年前に商いをやめられたと聞いた時は寂しく思いましたが、とても素敵な思い出としてしっかりと記憶に残っております。小さなお店でしたが、在校生の憩いの場であり放課後の店先には多くの学生が集っていました。その多くは男子生徒だったと記憶しています。当時の女子バド部は校舎外周がランニングのコースだったわけですが、その『なかよし』に集う学生達をギャラリーに、ぜいぜいはあはあと、真っ赤な顔で息を切らせながら走るのが恥ずかしかったのもいい思い出です。

今回の寄稿にあたり、改めて鳥取東高での3年間の学生生活を顧みたときに、楽しい思い出が多く浮かんできます。そんな酸っぱくもあり甘くもあり、何より楽しい時間を共に過ごせた仲間や恩師の存在は今でも大切な心の支えになっております。

時は流れ、そんな仲間と会う機会は徐々に少なくなってきていますが、故郷を離れていても交流を持てる場「東京東雲会」の存在はありがたいものです。そんな集いの場の存在への感謝の気持ちと共に、会の継続、発展のためにも協力をしていきたいと思っております。

古代東高史

倉恒 貞夫(山脈3回)

第4回 臨海学校あれこれ

昭和24年4月1日より新制度に従っての『鳥取東高』が誕生しました。この日までは「男女7歳にして席を同じうせず…」などといわれ、幼稚園は男女一緒でしたが小学校より男子組、女子組と分離されていて、はっきりと男子だけ女子だけの学校でした。当時は話をするのはおろか、ちらっと女子学生に方を見た—というところで鉄拳制裁(拳骨でなぐられること)を受けるような時代でしたから、ホームルーム活動、教室での勉強などいろいろ大変でした。

これまでは映画も見てはいけなかった、映画館に入ったのを見つけられたら親は呼び出し、本人は謹慎といった時代でしたが、これも急に映画を見ることが解禁され、学校に映画部ができ、映画部員は映画館のフリーパスをもらえたりしました。そして外国映画の恋愛キスシーンなどが大変話題となって来ていました。

そんななかで、初めての臨海学校が24年7月30日にクラス別で日帰りで行われました。

交通事情なども勘案してと記録にありますが、男子は海水パンツ、女子は昔風のシミーズのような海水着でした

兵庫県の諸寄でした。独自でんでんばらばらで、汽車に乗り、諸寄に行き帰って来ました。海でボートに



乗って沖へ出る生徒を担当毎に、自分のクラスの生徒を双眼鏡で監視されていました。男子生徒、女子生徒が遠くて、裸に近い状態で何をしているか—ということが重点だったようです。

昭和25年の夏は、前年のように各ルームで別々に諸寄に海水浴に行っては付添教員の負担が重すぎるという反省の下で、学校でまとまって海水浴に行くことになりました。

私は二年生でした。男女共学なのですが、選択コースの関係でか、男子生徒ばかりのクラスで、担任は世界史のM先生でした。諸寄小学校を借りて、板敷の教室に寝ました。女子の多いクラスは畳の作法室でした。駅の近くのお寺に泊まったクラスもありました。

食事は各クラス毎の自炊で、御飯炊き、料理作りも当番割りにしました。M先生にもイカのサシミを作ってもらったことを覚えています。このころの諸寄の海は海面から



昭和24年の日帰り

から泳いで見ても底にいるサザエがわかるほど私のような素人でも簡単に潜って取れるぐらい沢山いました。水中眼鏡をして岩に顔を近づけて見るとアワビも、小さいものがいくつか取れました。夕食の時は、サザエやアワビをサシミにして、校長先生も来ていただき、どういわけか、ビールやウイスキーが出てきて先生方に飲んでもらいました。生徒はもちろん飲みません。担任は躊躇しておられましたが、校長先生がよかろうといわれました。

担任の先生が沢山飲んで寝られたあと、皆が砂浜へ出ました。学校の物理のY先生に話の水をむけると、身振り手振り面白く酒を飲む話(このころ、戦争、戦後中はアルコールが不足していましたから)焼酎を番茶で割って飲む話、サイダーで割って飲む話、ちょっと飲んだら鼻をつまんで走るとよく酔うという話などいろいろと話していただきました。

どういわけか大きなヤカンを持って来ているものがいて皆でまわし飲みをしました。海岸の燃えそうなものに火をつけてファイヤーストームをやりました。きれいな星の下、走ったりデカンショ節や、ノーエ節で踊り狂いました。海岸で火を付けて燃やしたのは、船を引き上げる時の木などであったと翌日この事を大いに叱られました。自炊ではカレーライスなども作りました。各クラスでんでんばらばらの献立です。

夜、作法室で、数学の井上先生が尺八を吹いておられ、我々もそちらへ行きました。知らぬ男の人が神妙にかしこまって聞いておられました。先生は、「君いつの日か帰る」ホーリィチンツァイライを吹かれて我々に歌を教えられました。民謡や、流行歌などいろいろ、茶色というか褐色というか、黒くなった尺八で自由自在に吹いていただきました。先生の尺八を聞いていた人は、諸寄の琵琶のお師匠さんだということでした。



昭和33年のフォークダンス

昭和26年は、私達は3年生になりました。この年は学年単位で臨海学校が7月23～24日東浜で行われました。一、二年は全員でしたが、三年は希望クラスのみ。

私達三年B組はやはりM先生の担任クラスで、参加しましたが隣のクラスの3Aは不参加、担任の物理のY先生は学校の方の付添で来ておられたところが、海岸に出てみると3Aの生徒が沢山勝手に来て遊んでいました。学校の方では生徒は海から上がれと指示を出されると、わざとぞろぞろ海へ入りこみ、生徒全員海へ入れと号令をされると海から上がって来る——といったことを面白がっていました。東高を卒業してから、先生と一杯飲んでいるとき、この臨海学校のクラス生徒の行動のことで、ずいぶん他の先生に言われた——とこぼしておられました。

昭和27年は、鳥取大火の後なので、臨海学校が行われたかどうか？

昭和28年は、再び諸寄で、二泊三日、「浜坂の祭には、男女とも行くことを認める。当日は夕食を早めに済ませ、八時までに帰ること」副食費60円。小学校を借りて自炊。

東高開校当時から兵庫県の浜坂から通ってくる生徒が多く、諸寄とは峠をこえればすぐ隣という関係で、臨海学校中不足の食料品などすぐに取りに帰れるし、又、「川下(カウスソ)さん」という夏祭りは大変なにぎわいでした。

この昭和28年度は普通科、工業科、農業科で構成されていた総合制の東高は、この年に分離、普通科校となりました。このとき「鳥取東高」の名称の取り合いがあったとか。

昭和29年は、7月、鳥工の臨海学校の生徒が東浜に工事に来ている労務者に殴り込みをかけられるというトラブルが発生。直前になって中止。

昭和30年臨海学校は東浜で全学年一緒に二泊三日。以来、東浜における臨海学校が定着したようです。この年で東高が県内で最後まで行っていた五日制が廃止となりました。

昭和36年までは全校一、二、三学年

昭和37年より一年生のみ

東高の臨海教育は、平成9年に至る43年間続いたのですがこの長い間一人も水による事故がありませんでした。他の学校の生徒や人を助けたことは何回かあったようですが。このことは、宮脇通明(柏葉15)先生、本田義孝(山10)先生方の水泳部顧問の先生方をはじめとする先生方の献身的な努力・指導・水泳部員・水泳能力上位者による事前の海底調査、海流調査、一日中泳いでいる生徒の看視、諸準備、後始末などのおかげだとあらためて思います。

このあいだ平成13年7月7日「鳥取環境大学校が出来て入学した学生が浦富で二人溺死しました。残念ながら二人とも東高の卒業生だということです。臨海学校がなくなってからの生徒といわれています。

『古代東高史』は、倉恒貞夫先生(山3)が京阪神支部会報に寄稿されたものを、京阪神支部と先生、山崎勝彦さん(山12)のご了解を頂いて、掲載しています。

鳥取東高クイズ

100周年を迎えた鳥取東高の沿革・学舎・施設・部活動状況からの出題です！

- Q1：1922年6月に設立された鳥取県立鳥取第二中学は、将来7年生高校へ発展させる構想だった。○か×か？
- Q2：県内初の鉄筋コンクリート造の校舎を持ったのは鳥取東高である。○か×か？
- Q3：東高祭の最終を飾る運動会では、現在でもフォークダンスを在校生全員で踊っています。○か×か？
- Q4：2006年に完成しました東高の新食堂の名称は？ 1.おせっかい食堂 2.満腹食堂 3.東雲食堂
- Q5：東高は米子～鳥取間の駅伝競走に全校を上げて参加していますが、残念ながら優勝したことがない。○か×か？
- Q6：台所でよく見かける道具の名前が地名となっている鳥取市にある地名は？ 1.箸置 2.俎板 3.包丁
- Q7：日本の中で、鳥取発祥となっているものの内、間違っているものは次のどれか？
1.ゲートボール 2.グランドゴルフ 3.トライアスロン

クイズの答えは8ページに▶

鳥取からの便り

石原 敬子 (山脈65回)

岩美町在住の石原敬子と申します。現在は鳥取県立青谷高等学校で書道教諭として勤務し、今年で4年目になりました。



学生時代、東京東雲会の皆様とのお縁で総会に出席させていただきました。当時は東高卒の先輩方が経営されている飲食店をご紹介いただくなど、地元との繋がりを感じながら学生生活を送ることができ、ありがたい環境でした。

卒業後の社会人1年目は、長距離の車通勤に不安を感じておりましたが、なんとその年の春に山陰道の鳥取西IC—青谷ICが開通し、国道9号線の渋滞が緩和されました。勤務地まで約45分かかりますが、おかげ様でかなり快適な通勤生活を送っております。

勤務校の青谷高校は、豊かな自然と地域の歴史的遺産に恵まれ、特色のある授業が展開されています。学校から徒歩5分の青谷海岸でのサーフィン体験、青谷上寺地遺跡の発掘調査への参加、出土品の復元や古代米の研究をする探究授業、因州和紙の活用方法の検討など、多岐にわたります。社会人として地元に戻ると、鳥取の魅力の深さに日々驚くことばかりです。顧問をしている書道部は、赴任当時は1名でしたが、現在は6名となりました。全員初心者ですが、それぞれのペースで作品を制作し、昨年は全国規模の展覧会に出品することができました。今後も、生徒とともに日々成長したいと思います。

最後になりましたが、貴会のますますの発展を心よりお祈り申し上げます。



写真は青谷高校近くの川下神社。連なる鳥居の周りに桜が穏やかに咲き、心が和みます。

鳥取東高クイズ【答え】

- A1 : ○ 現在で言えば中学～大学一貫の教養課程の構想
- A2 : ○ 1955年4月完成。県内の学校建築の先駆けに
- A3 : ○ 在校生全員で踊る学校は東高だけとか
- A4 : 1. 正門向かって右手前にあるのは今も変わらず
- A5 : × 1946年の第1回大会で鳥取二中チームが優勝
- A6 : 3. 他にも材木町・職人町・御弓町など面白地名あり
- A7 : 1. ゲートボールは北海道帯広市が発祥。グランドゴルフは泊村、トライアスロンは米子市が発祥

おしらせ

◆東京東雲会総会 開催について

令和3年度は、10月16日開催へ延期させて頂きましたが3度(約9か月間にわたる)の緊急事態宣言の発出等があり残念ながら中止となりました。

令和4年度は、3月12日の役員・事務局会議において、以下の通り開催することを決定致しました。

東京東雲会 令和4年度総会『母校100周年記念』

日時：2022年7月2日(土) 12:00開会

場所：法曹会館(千代田区霞が関1-1-1)

会員の皆様へは6月初めにご案内致します。

感染防止対策には万全を期す所存ですが、当日体調がすぐれない・発熱の症状のある場合等は出席をご遠慮ください。また、行政当局から何らの制限が発出された場合は中止とさせて頂き、HP等でお知らせ致します。

◆母校100周年の記念事業の寄付・記念誌の広告掲載について

寄付：HPに掲載し広く呼び掛ける 寄付目標額4,000万円

・教育環境の充実 トレーニング場の機器更新

・奨学給付金の創設、記念公演、記念誌の発行 等

広告：東京東雲会会員一同として広告掲載

当会会費から支出させて頂きますのでご了承願います

*母校の更なる発展を願い、皆様からの寄付をお願い致します。

◆東雲会本部からのおしらせ

◆東雲会本部HP開設…100周年記念行事のこともご覧いただけます

◆母校創立100周年記念行事

6月23日(木) 鳥取東高創立100周年式典(於：高校内)

9月7日(木) 創立100周年記念式典(於：とりぎん文化会館 梨花ホール)

東高伝統行事『東高祭』に合わせ開催、同日夜祝賀会も予定されています。

◆2022年3月 創立功労者 徳田平一翁 が鳥取名誉市民となることが決定…100周年に相応しいビッグニュースです

◆その他のおしらせ

3月27日 深澤義彦さん(山脈22回)鳥取市長に再選(3選)されました。深澤市長には平成29年度総会において講演していただきました。

【編集後記】

「東京東雲」第5号は『母校創立百周年』を記念し、鈴木名誉会長はじめ東京東雲会の皆さまから東高在校時代の思い出や母校への想いなどの寄稿をいただきました。また東雲会鳥取本部や中島校長先生からも百周年を迎えての記念の寄稿をいただきました。寄稿いただいた多くの皆さまに深く感謝申し上げます。

(山脈22回 細谷 和夫)

[東京東雲会事務局]

〒182-0016

東京都調布市佐須町4-27-12 メゾン佐須202 細井様方

東京東雲会

電話：090-3087-1394 (幹事長 奥田)

Mail：tokyo.shinonomekai@gmail.com

[公式ホームページ]

https://tokyo-shinonomekai.jimdo.com/